

began in August. Preliminary analysis of data for the first six months revealed the following tendencies. In five of the six months the mean number of groups detected was highest at the least disturbed site. There were signs of a peak in detection rate around October/November. This corresponds to the peak of the mating season, and was probably a result of an increase in vocalizations at this time of year. Analyses of faecal samples indicated that insects, wild strawberries (*Rubus spp.*), and the fruit of *Ficus erecta* and *Stachyurus praecox*, were more common components of the diet at the more disturbed sites. By contrast, the fruit of *Elaeocarpus japonica*, and acorns of species of the *Fagaceae*, were more commonly found in faecal samples from the less disturbed sites. Even at this preliminary stage, the results strongly suggest that the degree of habitat disturbance influenced both the relative density of monkey groups and the composition of the diet. Future analyses will be explore these effects in more detail. Data from at least one annual cycle will be required to fully assess the impact of seasonal influences on both diet and ranging patterns.

自由 : 13

ニホンザル野生群におけるオス間関係の群間比較

高橋弘之 (京都大・理)

ニホンザルの野生群における群れオス間の社会関係は、群れによって異なることが報告されている。本研究は、同一地域に生息する複数の群れを観察することによって、オス間関係に群間変異をもたらす要因を明らかにすることを目的としている。

調査対象は、宮城県金華山島に生息するニホンザル野生群、A群およびB1群である。1994年の出産期から1995年の冬期にかけて群れオスを個体追跡し、グルーミング、近接等の社会的相互交渉の資料を収集した。

資料は現在整理中であるが、結果についてこれ

までに明らかになったのは以下の点である。

1) A群

A群は1994年4月から11月の調査時点で群れオスは3頭、1995年3月の調査時点で新たに1頭移入し4頭となった。メスの頭数は変動がなく、20頭であった。社会的性比は0.15から0.2となった。オス間のグルーミングは、1994年の交尾期に2位と3位の間で1例観察された。また、1995年の冬季に2位と新たに移入した4位の間で1例観察された。

2) B1群

B1群の群れオスの頭数は1995年3月の調査時点で5頭であった。メスは12頭であり、社会的性比は0.42であった。オス間のグルーミングは1995年の冬季に1位と2位の間で2例、1位と3位の間で1例、2位と3位の間で1例の4例が観察された。このうちの2例は、1位オスが2位および3位オスの催促をきっかけとして一方的にグルーミングを行った。

1995年の冬季について比較すると、A群のオス間のグルーミング交渉はB1群よりも希薄であったといえる。このオス間関係の群れによる違いには、社会的性比の違いが影響していると考えられる。群れの中に相対的に多くのオスが存在すると、彼らの間の緊張関係はより高まることが予測できる。したがって、社会的性比が高い群れでのオスの共存には、オス間の緊張関係を調整するために、親和的交渉が重要な役割を果たしていると考えられる。

自由 : 14

ニホンザル (*M.fuscata*) のワカモノ期メスの性行動

竹ノ下祐二 (京都大・理・人類進化論)

ニホンザル餌づけ群で初発情から初産までのワカモノ期メスの性行動を観察し、オトナメスのそれと比較した。調査対象は京都市嵐山の餌づけ群嵐山E群である。対象個体とし

て未経産メス5頭、オトナメス4頭を選び個体追跡によって行動観察をおこなった。その結果を以下にしめす。

(1) ワカメスは、オトナメスと比べると、マウントイベントの相手数、回数とも未成熟オスとで有意に多く、逆にオトナオスとは有意に少なかつ

た。しかし、ワカメス1頭あたりでは、オトナオスと未成熟オスの比は回数で同じくらいで、相手数では10%有意水準ながらオトナオスのほうが多かった。オトナオスのうちでは、中順位のオスとのマウントイベントが多かった。

(2) ワカメスは、発情時にはオトナオスには積極的に近接を維持する傾向がみられたが未成熟オスに対しては積極的でなかった。

(3) 発情時におけるオスへのリップスマッキング、プレゼンティングの頻度はオトナメスより高かった。

(4) オスからの求愛行動：オトナオスではワカメスに対する慰撫的リップスマッキングがみられたが、未成熟オスは慰撫行動なしにワカメスに接近してマウントイベントをおこなっていた。

これらの結果から以下の考察が導かれる。ワカモノ期のメスは、オトナメスとくらべ相対的に未成熟オスとの性交渉が多いが、未成熟オスはワカメスの主要なパートナーとはいえない。メスの積極性をみても、ニホンザルのメスは性成熟初期からオトナオスへのプリファレンスを持っていると考えられる。ワカメスで相対的に未成熟オスとの性交渉が多いのは次のような理由によるのだろう。すなわち、サバンナヒヒで指摘されているようにワカメスは社会的技術が未発達で、オトナオスへのおそれを克服し適切に交尾を完遂することができない。その一方でワカメスはオトナメスより性的アクティビティが高い。そのため、かわりに年齢も近く近づきやすい未成熟オスを受け入れてしまうことが多いのだと考えられる。

今後は、実際の交尾相手を決定する要因としてオス側のプリファレンスを考慮した分析が必要である。

自由：16

日本文化史における猿猴図の類型と変遷の研究 —猿猴図データベースを基礎として—

都守淳夫（犬山市・愛知）

書画骨董類の売立目録に掲載された図版類は、日本文化史上に途上する猿類の説話や寓話の書誌学的研究の傍証資料ともなる。22法人機関の所蔵する延べ16000余冊の売立目録の実見から3777種の冊子を特定し全国所在目録としていま公刊中であるが、その中に筆者は1800件の猿猴図を検索し

6500枚の写真資料化を完了した。現在、主題別、時代別、作家別等による図像の類型化と変遷の分析に着手したところである。その中で、江戸期の城郭をかざった「猿猴捉月図」の意外な変遷の側面が判明したので報告する。

名古屋城上洛殿（1634年家光上洛時の宿舎として増築）の上段の間北入側の杉戸に狩野探幽（1602-74）により、2頭の牧溪様手長猿が枝より連なり湖面の月を取ろうとする捉月図が描かれていた（焼失）。それは君主のあるべき姿を諭す諷戒性の高い捉月図であった。ところで、江戸城の天保十年度（1839）の西の丸と、弘化二年度（1845）の本丸の御造営時の杉戸下絵の中に「岩に猿猴図」がある。いずれの絵柄にも折れた柏の流木にのる牧谿様手長猿が水をかき回し、岩上の猿がこの方を指差している。杉戸の位置はともに表大広間入側（上段北）であるから、松の廊下がこれにつづく。下絵群にはこれと別に、枝に連なる手長猿の「捉月図」の絵柄を含む九尺二枚建杉戸があるが、この建具の取付場所は不明とされている。

ところが流木にのる猿と、枝より連なり水月を取ろうとする数頭の猿が一つの屏風画面に描かれた作品が、この度の売立目録図版から「探幽：松鶴月猿猴六枚折屏風」、「常信：柳猿猴浪小禽屏風」、さらに「常信：墨画屏風」として発見された。このことから、位置不明の捉月図杉戸がその間取り寸法や画風から表大広間入側に関係づけられ、さらにこの屏風絵柄が狩野派模写本群に発見されれば、捉月故事の猿たちは枝が折れ水面に落ちてもお、折れた枝にのり「撈月」に動しむパロディーの主人公として、表上段北入側に登場していたことになる。これが、万治二年度（1659）御造営当時の同場所の探幽筆「岩猿猴図」まで遡行できれば、名古屋城上洛殿の捉月図とは対照的な解釈がすでにこの時期に成立していたこととなる。ちなみに1927年11月、パリの日本画オークションに出品された流出本「英氏画苑」（英一蝶：1652 - 1724）に、5頭の手長猿が折れた柏の枝にのり、棹をさし舵をとり天月に腕をのぼし水面を撈する図柄があったことも、この度判明した。